



# 進路だより



11月19日は進路説明会です！

Vol.41 2021.11.12

## あと12日で第2回定期テスト！

先週の木金に第3回実力テストが終わったばかりなのに、もうすぐ**第2回定期テスト**がやって来ます。「なんでこんなにテストばかりなんだよ〜！」と嘆いている人もいるかもしれませんが、それが3年生の宿命です！今回は3年生2学期を締めくくるとても重要なテストです。なぜなら高等学校に提出する調査書に記入するのは「3年生2学期までの成績」だからです。1学期になかなか結果が出なかった人も、2学期に頑張った成果を今回の定期テストで大きく花を咲かせて欲しいものです。そしてそのパワーを受験まで持続させてほしいものですね！



さて本日12日（金）6校時に**2021年度2学期第2回定期テスト「今度こそ！」学習計画表**を作成しました。今回も**10日間で2400分以上**の自宅でのテスト勉強時間を確保するように計画をたてました。みんな真剣に考えながら教科ごとの目標点数と目標時間を記入していました。今回のテストが私立高校受験前の最後の定期テストになります。これまでの頑張りを少しでも発揮できるよう、充実した12日間を過ごしてほしいものですね。

## 親子進路説明会(授業参観)

11月19日（金）「授業参観及び学級PTA」が開催されます。そのうち5時間目の「授業参観」では「親子進路説明会」を実施します。

今回の説明会では、**令和4年度の高等学校入試要項の変更点**や**最近の高校入試の動向**、**入学願書等の書類の記入の仕方**などについて説明します。受験については毎年変動することがあることから、今回初めて高校受験を迎える保護者の皆さんはもちろん、「お兄ちゃんの時に経験済みだから大丈夫！」「お姉ちゃんの時は何も問題がなかった！」という経験済みの保護者の皆さんも、是非11月19日（金）体育館での親子進路説明会にお越しください。



## 11月15日は七五三ですね！

鹿児島市照国町の照国神社で「七五三」の祈願に訪れる家族が目立つようになった。例年は10月からにぎわうが、新型コロナウイルスの感染予防対策として早めに受付を開始。神社は「去年は9月に約100組、10月は約700組に来ていただいた。今年も分散参拝に協力してほしい」と呼び掛けている。17日は、鮮やかな衣装をまとって境内で写真撮影をしたり、健やかな成長を願って祈願したりする姿が見られた。家族4人で訪れた鹿児島市の小林梨沙ちゃん（5）、大和ちゃん（4）は「いつもより早起きした。きれいな着物で良かった」と喜んだ。社務所では、子どもの長寿を願う「千歳飴（ちとせあめ）」の準備が進む。巫女（みこ）2人が、紙風船や風車などを丁寧な手つきで入れていた。同神社によると七五三は、徳川5代将軍綱吉の子どものお祝いを11月15日にしたことが由来とされる。例年この日は約800組が訪れるが、去年は200組程度だったという。

(2021/09/17 南日本新聞より)

もうすぐ七五三ですね。子供達ははあんまり覚えていないかもしれないけれど、保護者の皆さんはまるで昨日のここのように覚えていらっしゃるのではないのでしょうか。あれから子供達はずいぶん成長したことだと思います。その子供達がいよいよ受験に向かっていきます。我が子の健やかな成長を願ったあの頃のように、受験に立ち向かう子供達を精一杯応援したいものですね。

## 【親父の手話】

俺には母親がない。俺を生んですぐに死んでしまったらしい。生まれたときから耳が聞こえなかった俺は物心ついた時にはもうすでに簡単な手話を使っていた。耳が聞こえない事で俺はずいぶん苦勞した。普通の学校には行けず、障害者用の学校で学童期を過ごしたわけだが、片親だったこともあってか近所の子供に馬鹿にされた。耳が聞こえないから何を言われたか覚えていない（というか知らない）。が、あの見下すような馬鹿にしたような顔は今も忘れられない。その時は自分がなぜこんな目にあうのかわからなかったが、やがて障害者であるということがその理由だとわかると俺は塞ぎ込み、思春期の多くを家の中で過ごした。自分に何の非もなく、不幸な目にあうのが悔しくて仕方がなかった。だから俺は親父を憎んだ。そして死んだ母親すら憎んだ。なぜこんな身体に生んだのか。なぜ普通の人生を俺にくれなかったのか。手話では到底表しきれない想いを、暴力に変えて叫んだ。ときおり爆発する俺の気持ちを前に、父は抵抗せず、ただただ涙を流し「すまない」と手話で言い続けていた。その時の俺は何もやる気がおきず、荒んだ生活をしていたと思う。

そんな生活の中での唯一の理解者が俺の主治医だった。俺が生まれた後、耳が聞こえないとわかった時から、ずっと診てくれた先生だった。俺にとってはもう一人の親だった。何度も悩み相談にのってくれた。俺が父親を傷つけてしまった時も、優しい目で何も言わず聞いてくれた。仕方がないとも、そういう時もあるとも、そんな事をしては駄目だとも言わず、咎める（とがめる）事も、慰める事もせず聞いてくれる先生が大好きだった。

そんなある日、どうしようもなく傷つく事があって、泣いても泣ききれない、悔しくてどうしようもない出来事があった。内容は書けないが、俺はまた先生の所に行って相談した。長い愚痴のような相談の途中、多分「死にたい」という事を手話で表した時だと思う。先生は急に怒り出し、俺の頬をおもいっきり殴った。俺はビックリしたが、先生の方を向くと、さらに驚いた。先生は泣いていた。そして俺を殴ったその震える手で、静かに話し始めた。

ある日、俺の親父が赤ん坊の俺を抱えて先生の所へやってきたこと。検査結果は最悪で、俺の耳が一生聞こえないだろう事を父親に伝えたこと。俺の父親がすごい剣幕でどうにかならないかと詰め寄ってきたこと。そして次の言葉は俺に衝撃を与えた。

「君は不思議に思わなかったのかい。君が物心ついた時には、もう手話を使えていた事を。」  
たしかにそうだった。俺は特別に手話を習った覚えはない。じゃあ、なぜ・・・

「君の父親は僕にこう言ったんだ。『声と同じように僕が手話を使えば、この子は普通の生活を送れますか』ってね。驚いたよ。確かにそうすればその子は、声と同じように手話を使えるようになるだろう。小さい頃からの聴覚障害はそれだけで知能発達の障害になり得る。だが声と同じように手話を使えるのなら、もしかしたら・・・でも決してそれは簡単な事じゃない。その為には今から両親が手話を普通に使えるようにならなきゃいけない。健常者が手話を普通の会話並みに使えるようになるのに数年かかる。全てを投げ捨てて手話の勉強に専念したとしても、とても間に合わない。不可能だ。僕はそう伝えた。その無謀な挑戦の結果は君が一番よく知ってるはずだ。君の父親はね、何よりも君の幸せを願っているんだよ。だから死にたいなんて、言っちゃ駄目だ。」  
聞きながら涙が止まらなかった。

父さんはその時していた仕事を捨てて、俺のために手話を勉強したのだ。俺はそんな事知らずに、たいした収入もない父親を馬鹿にしたこともある。俺が間違っていた。父さんは誰よりも俺の苦しみを知っていた。誰よりも俺の悲しみを知っていた。そして誰よりも俺の幸せを願っていた。濡れる頬をぬぐう事もせず俺は泣き続けた。そして父さんに暴力をふるった自分自身を憎んだ。なんて馬鹿なことをしたのだろう。あの人は俺の親なのだ。耳が聞こえないことに負けたくない。父さんが負けなかったように。幸せになろう。そう心に決めた。

今、俺は手話を教える仕事をしている。そして春には結婚も決まった。俺の障害を理解してくれた上で愛してくれる最高の人だ。父さんに紹介すると、母さんに報告しなきゃなと言って父さんは笑った。でも遺影に向かい、線香をあげる父さんの肩は震えていた。そして遺影を見たまま話し始めた。俺の障害は先天的なものではなく、事故によるものだったらしい。俺を連れて歩いていた両親に、居眠り運転の車が突っ込んだそう。運良く父さんは軽傷ですんだが、母さんと俺はひどい状態だった。俺は何とか一命を取り留めたが、母さんは回復せず死んでしまったらしい。母さんは死ぬ間際、父さんに遺言を残した。

「私の分までこの子を幸せにしてあげてね。」

父さんは強くなずいて、約束した。でもしばらくして俺に異常が見つかった。

「あせったよ。お前が普通の人生を歩めないんじゃないかって。約束を守れないんじゃないかってなあ。でもこれでようやく、約束果たせたかなあ。なあ・・・母さん。」

最後は手話ではなく、上を向きながら呟くように語っていた。でも俺には何て言っているか伝わってきた。俺は泣きながら、父さんにむかって手話ではなく、声で言った。

「ありがとうございます！」

俺は耳が聞こえないから、ちゃんと言えたかわからない。でも父さんは肩を大きく揺らしながら、何度も頷いていた。

父さん、天国の母さん、そして先生、ありがとう。

俺、いま幸せだよ。